

柳宗悦「彼の朝鮮行」と柳兼子独唱会  
—朝鮮文化事業における行為遂行的メディア戦略—Yanagi Muneyoshi's "Kare no Chôsenkô" (His trip to Korea)  
and Yanagi Kaneko's Recitals

梶谷 崇\*

KAJIYA Takashi

## Abstract

Yanagi Muneyoshi (1889-1961), a philosopher and esthete who actively engaged in Japan-Korea cultural exchange from the Taisho to the Showa eras, released a travel report entitled "His Trip to Korea" (Kare no Chôsenkô) in the journal *Reconstruction* (Kaizô) in October 1920. He expressed his own thoughts on cultural exchange projects in Korea and reported on recitals in Seoul by his wife, Yanagi Kaneko (1892-1984), an alto singer representing modern Japan. In this report, Muneyoshi mentioned Kaneko's tour of Japan after returning from Korea to raise funds for his project, which has created an image of Kaneko as devoted to her husband. However, this research makes it clear that her recitals were not directly related to his project, indicating that Muneyoshi's description was not just a report, but rather a performative text that reconstructed their practices to convey his ideas to the readers. His social practices and writing activities created supporters in various places in Japan and Korea, after which he started the project of establishing the Korean Folk Art Museum in 1921. This analysis of "His Trip to Korea" clarifies how Yanagi Muneyoshi executed his project through his writing activities and Kaneko's recitals.

## 1. はじめに

1920年10月に『改造』誌上に発表された柳宗悦(1889-1961)による「彼の朝鮮行」は、妻で声楽家の柳兼子(1892-1984)を伴った朝鮮旅行での見聞を元に書かれた紀行文である。1919年の三・一運動勃発以来、柳宗悦は朝鮮について同情的な社会的言論活動を展開していたが、柳は彼の敬愛の念を朝鮮の人々に伝えることと、兼子の独唱会を京城(現在のソウル)で開催することを目的として1920年5月1日に朝鮮に旅立った。柳宗悦は独唱会の様子や現地の人々の様子、そして彼の思想や活動に対する国内外からの反応や日本での活動について報告している。

この文章は柳宗悦の伝記研究における一次資料となっており、人道主義者としての柳宗悦像を形作る上での重要な根拠資料として位置づけられてきた<sup>(1, 2)</sup>。また、柳兼子研究においても「彼の朝鮮行」は彼女の音楽活動を跡づける上で重要な一次資料として扱われてきた<sup>(3, 4, 5, 6)</sup>。文中では朝鮮での独唱会についての言及もあり、独唱会の開催と受容の様子を理解する上で重要な資料となっている一方で、「彼の妻は凡そ一と月の間家と子供とを離れて、北は北海道や新潟や、南は阪神や岡山迄、寧日なく音

楽の旅を続けた」という叙述が見られ、その時期の柳兼子の音楽活動を知る手がかりとなっている。これは柳宗悦が計画した朝鮮での文化事業の資金集めを目的として兼子が国内を巡演したということを示唆する一文であるが、柳兼子研究においても柳兼子の活動履歴を知る資料となっている。

以上のような「彼の朝鮮行」の既存の研究の扱いは、人道主義の立場から朝鮮の文化事業に情熱を傾けた夫柳宗悦とそれを音楽の力で支えた妻兼子という夫婦像を導き出す傾向があった。彼らの朝鮮での活動自体は他の文献資料等との照合からも事実であるのは確かだが、ただ先に挙げた国内各地での音楽会の詳細については実はこれまで十分に明らかにされてこなかった。

そこで今回改めて当時の北海道、新潟、阪神、岡山で行われたという兼子の独唱会について文献資料調査を行った。その結果いくつかの新たな事実が浮かび上がってきた。結論を先に述べてしまうと、それらの独唱会が柳の文化事業と関連していることを明確に示す資料が存在するのは新潟のみであり、他はそのような記述や報告が見当たらず、むしろ無関係と考えられる活動も含まれていることが明らかとなった。当時の兼子の音楽活動の報道のさ

れ方と宗悦による「彼の朝鮮行」の記述との間には齟齬が存在しているということである。このことから「彼の朝鮮行」の記述と事実を改めて精査し、このテキストの性格や位置づけについて検討して見る必要がある。

以上のような問題意識のもと、本稿では、独唱会開催事情について新資料も含めて再構成して実態を把握し、それを踏まえて「彼の朝鮮行」の位置づけの考察・再評価を試みる。伝記的一次資料として「彼の朝鮮行」を読むだけではなく、兼子の独唱会の実態を踏まえながら、当時の柳宗悦の文化活動の流れの中でこのテキストが果たした役割について検討したい。

## 2. 「彼の朝鮮行」に至るまで

1914 年に中島兼子と結婚した柳宗悦は千葉県我孫子に新居を構えた。宗教哲学者として美の問題に関心を持っていた柳は、我孫子においてウィリアム・ブレイクや中世キリスト教神秘主義へ思索を広げ、『白樺』誌上で活発に言論活動を展開していた。同じ頃、浅川伯教との出会いをきっかけに、柳は朝鮮陶磁器の美に魅せられ、1916 年には初めての朝鮮を旅している。柳はそれの経験から伝統や民族が生み出す美、手仕事の美など、のちの朝鮮美術論や民藝美学につながる思想の端緒をつかんでいる。

1919 年 3 月 1 日に朝鮮で勃発した三・一運動とそれへの弾圧は朝鮮美術に関心を寄せていた柳にとって衝撃的な出来事であった。柳は運動勃発後、『読売新聞』（5 月 20 日～24 日）に最初の朝鮮論である「朝鮮人を想ふ」を発表した。柳の主張は、政治的軍事的支配は反発を招くだけであり、むしろ芸術や宗教による内面的な相互理解こそが融和をもたらすという趣旨のもので日本国内、朝鮮からも柳の言論への賛同者が現れた。

続いて柳は日朝の相互理解推進を目的に、芸術・宗教的な文化事業を日本と朝鮮において実践することに活動の歩を進めた。まず『白樺』7 月号で東洋美術の紹介記事を書き、翌 1920 年 2 月号で朝鮮美術を特集した。朝鮮美術の特質や日本との影響関係について解説し、朝鮮芸術への理解を促した。

1920 年 1 月 28 日には『読売新聞』において柳夫妻が渡鮮して音楽会を開催することが報じられた。「目下喧しい問題たる朝鮮の教化に就いて、藝術上から融和を計」という目的で、5 月中旬に朝鮮で音楽会を開催し、その純益金を社会救済事業、朝鮮

芸術の研究費等に充てることと、講演会等を開いて現地の有為の人々と意見交換をする計画であることが報じられている。この計画は朝鮮で発行されていた日本語新聞『京城日報』（2 月 3 日付）においても「芸術上の教化」という言葉をもって紹介されたが、それに対し柳は「教化」という言葉を使用する報道に対し抗議をしている。

3 月には信州白樺派の中心人物である赤羽王朗に、朝鮮への渡航費用に充当する目的で信州での音楽会開催を打診している。信州白樺派とは大正初期からすでに交流があり、白樺が 1917 年頃計画した白樺美術館の設立資金募集音楽会もたびたび信州で開催し兼子も出演していた<sup>(7,8)</sup>。柳が音楽会開催を打診した当時、赤羽は療養中であつたため開催を断念している。だが赤羽は「政治以上の大きい運動」であり音楽会は開催できないが、「僅かなりとも皆の心持ちを集めてその一部に迄捧げたい」として資金を援助した<sup>(9)</sup>。

柳は 4 月には「朝鮮の友に贈る書」を発表した。この文章は最初に『東亜日報』紙に朝鮮語訳が連載された後、『改造』6 月号に日本語の文章が掲載された。『東亜日報』は三・一運動後、統治政策の転換に伴って出版言論の自由が限定的に許容され、1920 年に創刊された民族紙の一つである。創刊間もない『東亜日報』は 4 月 12 日から 18 日にかけて「朝鮮人を想ふ」を、次いで 19 日、20 日に「朝鮮の友に贈る書」を翻訳掲載した。ただし 21 日には当局の注意により「朝鮮の友に贈る書」の連載は 2 回で中止を余儀なくされた。全体の 5 分の 1 程度しか掲載されなかったことになる。

冒頭「私の知れる、又は見知らぬ多くの朝鮮の友に、心からの此書翰を贈る」という一文から書き始められているとおり、この文章は朝鮮の人々に対する柳からのメッセージという形式をとっている。4 月 10 日という執筆日が記載されているが、掲載開始日が 4 月 19 日であることから、『東亜日報』のために柳が書き下ろしたものであると考えて良いだろう。同年 5 月の柳兼子音楽会は東亜日報社初の主催イベントとして開催された。したがって「朝鮮の友に贈る書」は、イベント開催に向け朝鮮人読者に対して趣旨を述べた文章であるといえる。東亜日報社側でも連載と並行して、柳宗悦を朝鮮文化の理解者であり尊敬の念を持つ日本の知識人として好意的に紹介した。朝鮮への敬愛の情を示したい柳と、文化的民族主義を鼓舞したい東亜日報社との協力

関係の中で、音楽会が文化イベントとして盛り上がっていくのである<sup>(10)</sup>。

日本語による「朝鮮の友に贈る書」は当初『改造』5月号に掲載予定であった。しかし治安当局の介入により多くの部分が伏字にされ、柳本人もすぐに自分の文章とわからない程の改ざんが加えられて6月号に掲載されたのだった。高崎宗司<sup>(11)</sup>の分析によると、伏字箇所は朝鮮の苦しみを描いた部分、日本の不正を認めた部分、日朝間の不幸な関係を正したいという信念を吐露した部分であった。

それでもこの文章は発表されてすぐに社会的に反響を呼んだ。『読売新聞』(6月7日付)「六月の文壇から(六)柳氏の朝鮮に対する同情」という記事は、柳の文章を「恐らく朝鮮民族を最もよく理解してゐる日本人の同情の声」であるとし、「誰にも先んじて此情感に共鳴し、「私も柳氏と共に日本を信用して、「真理にまで国家を高めたい」ことを切望する者である」と共感を述べている。また当時日本で発行されていた英字新聞である『The Japan Advertiser』誌(6月16日付)にも要約された形で英訳掲載された。

「彼の朝鮮行」によれば、「朝鮮の友に贈る書」は伏字だらけであったにも関わらず、多くの読者からの反響があり、柳は共感の手紙や寄付金を受け取ったという。柳は「彼の朝鮮行」において「若い日本の人々が、既に朝鮮の温い味方であるのを見出し、どんなに感謝し、又鼓舞せられた事であろう」と述べている。事実、この時期柳宗悦は日本国内外の若者たちとの交流を深め、新たな関係を築いている。朝鮮人青年知識人たちや、信州白樺派との交流も盛んになっている。後述する新潟アダム社の式場隆三郎や吉田璋也らと交流を持つようになったのもこの時期である。

ところで、1920年4月柳が朝鮮旅行を目前に控えている時期に柳宗悦は兼子と連名で『『音楽会』趣意書』という文章を発表している。この「趣意書」で柳は「日本と朝鮮とは、もっと心からの友」であるべきで、「真の平和や友情を内側から持ち来すものは宗教や芸術の道」とであると説いている。そして「隣邦の人々に対する兼々の信頼と情愛のしるしに今度渡鮮して音楽会を開きその会を朝鮮の人々に献げる」ことと、「日鮮協力の文芸や学芸の雑誌を計営したい」ということ、その資金募集のため日本各地で柳兼子の音楽会の開催したいという計画を述べる。朝鮮から帰国した柳兼子は趣意書にあると

おり早速国内での活動を開始した。これが「彼の朝鮮行」で触れられている一連の独唱会であり、柳宗悦は「各地の人々から彼は厚い返事を受け、(中略)彼等の同情と好意とによってかゝる会が企てられる様になった事を彼は深く感謝した」という。次節では柳兼子の国内での巡演について見ていきたい。

### 3. 柳兼子独唱会の経過

#### 3-1. 東京における独唱会

柳兼子の音楽活動については小池静子や松橋桂子の評伝や年譜によって全生涯にわたって整理されているが、この1920年に行われた一連の独唱会については数行の言及にとどまっております、曖昧な部分が多い。たとえば小池静子<sup>(4)</sup>はこれらの独唱会を「美術館設立資金集めの大興行」とし、白樺美術館設立を後援するための独唱会と位置づけている。しかし、この時点では白樺美術館計画はすでに放棄されていたし、先に紹介した「趣意書」の言辞と整合しない。このように既存の柳兼子研究においてもこの時期の兼子の独唱会は整理が曖昧な状態にある。

また「彼の朝鮮行」の記述から、独唱会は後述する9月の北海道公演から始められたと従来見られているが、実は7月2日に東京神田の青年会館で開催された独唱会にその最初の活動が見出せる。松橋桂子<sup>(6)</sup>はこの独唱会を、ドイツへの音楽留学費用準備のための自主リサイタルであると説明しているが、むしろ『音楽界』(1920年8月号)では、この音楽会について、「七月二日には柳文学士の計画になる、日鮮人の間を文芸と学芸の力によって繋ふといふ第一著手として兼子夫人の独唱会を神田の青年会館に開き、会場で兼子からもその趣旨の発言がなされたことを紹介する記事が掲載されおり、この独唱会が「趣意書」の趣旨に沿った最初の活動として開催されていたことを明確に伝えている。柳の文化事業としての独唱会は7月2日に開始されていたと見るべきである。

兼子研究者においても、この時期の音楽活動については正確に整理されているとは言えない。理由の一つは資料収集上の困難であろう。大正期の音楽会資料は多くは保存されておらず、新聞や雑誌における報道記事に頼るしかない。中央楽壇における活動はある程度追うことができるが、地方での公演は資料が限定される。特に松橋による兼子の活動年譜は大変な労作であるが、それであっても地方公演については未詳部分が多い。未発見資料もまだ多く残さ

れていると考えられる。データベースによる検索システムが整備されることで、今後新たな資料が見つかる可能性もある。

### 3-2. 北海道における独唱会

「彼の朝鮮行」の記述通り、残された資料からは、9月に北海道、新潟、阪神、岡山のステージに兼子が立っていることが確認できる。北海道では14日札幌、15日小樽と二日続けて公演している。札幌での独唱会は札幌音楽普及会および帝国音楽家協会札幌支部の主催により、小樽では小樽啓明会主催により開催された。

ところで柳兼子は約2ヶ月前の7月にも来道し、函館、小樽、札幌を巡回している。ただ、その際は東京混声合唱団17名の一人としての来道であった。主催者も同じく札幌音楽普及会である。合唱団と独唱会という違いがあるとはいえ、2ヶ月も経ずに東京から同じ音楽家を招くというのは異例であろう。この背景に柳宗悦の事業への賛同の意図を読みたいところであるが、残された資料にはその痕跡はない。『北海タイムス』（9月16日付）「柳夫人の独唱」という記事は「在札幌好楽家の入場二百余名に達しホール廊下に溢るゝの盛会なりき」といったように当日の様子が紹介されるにとどまる。また、札幌音楽普及会とは東京混声合唱団の招聘のために札幌の音楽愛好家たちが集まって新たに結成された、その名の通り音楽普及団体であった<sup>(12)</sup>。聴衆の感想談話が『北海タイムス』（9月18日付）に掲載されているが、そこでは「比較的有識階級に富める札幌人士が此会の様な真面目なしかも有意義の会を飽きも賛助して其会の主旨を大いに一般に徹底せしめて欲しい」と述べられており、札幌での会は札幌音楽普及会の趣旨に沿って開催されたようである。

一方の小樽は『小樽新聞』が開催数日前から連日報道しており札幌以上の盛り上がりを見せている。『小樽新聞』（9月13日付）「柳兼子氏独唱会」において「東都声楽の第一人者柳兼子独唱会」の開催が告知され、14日には演奏曲目が紹介されると同時に「入場券の売行頗る盛ん」と盛り up を伝えている。15日独唱会当日は柳兼子の上半身写真が掲載され、17日には「豊艶の肉声とピアノの楽音に＝満場酔へるが如く」という報告記事が掲載された。「立錫の余地なき盛況」であったという会場には500人の聴衆が集まり、「或いは軽快又は悠揚自由自在なる豊艶なる肉声と洗練されたピアノの楽音に満場酔ひるが如く折しもそぼ降る秋雨に和して実

に快い柳アーバンドであった」と会場の様子を伝えている。

ところで、小樽での独唱会と「趣意書」との関係についても、札幌同様に明確にそれを伝える資料は見出すことができない。だが主催の小樽啓明会については留意すべきである。亀井志乃<sup>(13)</sup>によると小樽啓明会とは1919年に小樽で結成された文化啓蒙団体であり、主な会員には青年実業家の高田紅果や当時北海道大学の学生で後に経済学者・小説家となる早川三代治がいた。17日記事には開会にあたり「主催啓明会を代表して高田氏の挨拶」があったと伝えられているが、この高田氏とは高田紅果であると考えられる。高田は啓明会以前より文学や美術を愛好する団体を結成し、小樽の文化活動を牽引してきた。また、ホイットマンに傾倒していた早川は有島武郎を慕って1913年に東北帝国大学農科大学予科に入学しているが、彼の斡旋によって小樽での有島武郎講演会が実現している。

有島と近い関係にある高田や早川が、『白樺』を通じて柳の活動のある程度理解していることはむしろ当然のことであろう。柳の趣旨に賛同し小樽での独唱会開催に至った可能性は十分にある。挨拶において柳の事業に多少なりとも言及していたとしても不思議ではない。ただし、これは想像の域を出ず、新たな資料の発見が望まれる。

### 3-3. 新潟における独唱会

小樽での公演を終えた柳兼子はそのまま海路新潟へ移動し独唱会を開催した。主催はアダム社である<sup>(14)</sup>。アダム社は新潟医専（新潟大学医学部の前身）の学生であった式場隆三郎や吉田璋也らが『白樺』の影響を受けて1919年に結成した文化団体である。11月には文芸雑誌『アダム』を創刊している。数名の学生による小さな団体としてスタートしているが、活動は活発で12月には信州の白樺派グループが長野で開催していたロダン展を見学しに行き信州白樺派と交流をもった。1920年4月には式場、吉田らが武者小路実篤に新しき村入会の意志を伝えるとともに新潟支部の設立を申し入れて、20日に実篤から礼状とともにその申し出が容れられている。そのような熱心な活動と人的交流を経て、1920年9月13日に武者小路実篤を招き新しき村講演会、そして4日後の17日に柳兼子独唱会と立て続けに文化イベントを主催していった。

式場隆三郎はこの独唱会の開催について『アダム』3巻1号（1921年1月）において明確に柳の朝鮮文

化事業への賛意から主催したと述べている。

日頃尊敬してゐる柳宗悦先生が朝鮮との温かい  
友誼を結ぶための御運動の一部をお手伝するた  
めに七月から計画した柳兼子夫人の音楽会を九  
月十九日に開催した。(中略)この準備のために  
同人は日夜働きつづけた。その効あって当夜は実  
に盛会であった。八百近い聴衆が集った。(中略)  
色々な障害や圧迫があつたに拘らずともかく  
あゝした気持ちよくいったのは嬉しい。柳先生御夫  
妻も自分たちの小さい厚意を過分に欣んで下す  
った。

この時点でアダム社のメンバーは柳宗悦とは面  
識はなかった。柳の運動についての理解は新聞雑誌  
メディアを通してということになる。『読売新聞』や  
『京城日報』紙上では、柳が朝鮮人を「教化」しに  
行くと表現され、柳がそれに反発したことはすでに  
触れたが、式場は「温かい友誼を結ぶ」と表現して  
おり、柳の意図を理解していることがわかる。

一方で地元新聞も音楽会について報じている。

『新潟毎日新聞』(9月16日付)は「柳兼子夫人を  
迎へんとて」という兼子の紹介記事を書き、新潟で  
歌声が聴けることを感動的に書き記している。9月  
21日(夕刊)では「独唱の夜」という記事が兼子の  
音楽会を紹介している。同記事は800人余の聴衆が  
集まり、「主に知識階級の若い人々で、学生が其最も  
多くを占めて居た」と伝えた。兼子の歌声について  
「落ち着いたある柔かな韻律と諧音の妙は秋の夜  
の空気を春のやうにまで暖かにそして聴者をして  
母親の胸に抱かれて静かに眠る小児のやうな心地  
に潤させた」と詩的に印象を語っている。

ただ、新聞では朝鮮事業との関連について一切触  
れられていない。小樽啓明会の高田同様にアダム社  
同人による開会の挨拶は当然あつたはずであるが、  
それも報じられていない。式場の述懐にある「色々  
な障害や圧迫」とは、具体的には何かは記されてい  
ないが、朝鮮に関する運動であることから何らかの  
圧力を加えられたとも推測される。音楽界開催当時、  
三・一運動の指導者孫秉熙の公判が行われ、未だ運  
動の騒ぎは収まっていなかった。新聞各紙には朝鮮  
に関連して「暴動」「騒擾」「不逞」の文字が連日の  
ように見られた時期である。挨拶でその趣旨に触れ  
られなかったのか、あるいは触れていたとしても新  
聞メディアがそれを報じることを避けたのか。この

ような事態は小樽の啓明会においても同様のことが  
考えられる。

「彼の朝鮮行」の記述に従えば、兼子はその後関  
西、岡山へ移動したことになるが、その間に  
一志茂樹や<sup>(8)</sup>や小林多津衛<sup>(15)</sup>の述懐によると、彼ら  
の世話で20日に長野、21日に上伊那において兼子  
が公演したという。ただし彼らの述懐以上について  
は不明で、今回の調査でも関連資料を見出すことは  
できなかった。柳が信州での公演に言及していない  
ということは、公のものではなく内輪の小規模なも  
のであつたと推測される。

### 3-4. 阪神・岡山における音楽会

『読売新聞』(9月13日付)「大阪の音楽会」とい  
う短い記事では、25日に大阪各組合教会婦人会主催、  
中之島中央公会堂を会場に世界日曜学校大会の資  
金募集を目的として、東京より柳兼子と武岡鶴代ら  
を招聘することが報じられている。武岡は当時柳兼  
子と並び称される日本を代表するソプラノ歌手で  
ある。『大阪毎日新聞』(9月24日付)では、「GRAND  
CONCERT 慈善大音楽会」と称して広告が掲載されて  
いるが、そこには柳兼子、武岡鶴代、榊原ピアノト  
リオが写真付きで紹介されている。この時期関西で  
確認できるのはこの慈善音楽会のみである。

続いて兼子の足跡は翌26日の岡山に見いだせる。

『山陽新聞』(9月25日付)は「待るゝ音楽会」と  
いう記事で26日物産館楼上で六高卒業生有志楽友  
会主催の音楽大演奏会が開催されることを報じて  
いる。現地の楽友会有志が「岡山楽壇の為め少しで  
も貢献したい」という目的で開催したものだが、共  
演の武岡鶴代が岡山県津山出身である縁も大きく  
関わっているだろう。武岡はそれ以前から岡山で音  
楽会に凱旋公演をしていた。出演者は大阪での音楽  
会と全く同じ顔ぶれ、掲載写真も『大阪毎日新聞』  
の広告で用いられていたものと同一あり、26日付同  
紙のプログラム紹介によれば、演奏曲目も大阪の音  
楽会と同じものであつたようだ。大阪での音楽会に  
招聘された柳兼子らの一行が、武岡の縁もありその  
まま岡山まで巡演したという解釈が妥当なところ  
であろう。27日には音楽会の報告記事が掲載されて  
いるが、八百名の聴衆が立錫の余地なく詰めかけた  
と盛会の様子は報じられるものの、柳宗悦の事業と  
の関連性はやはり見出すことはできない。『音楽界』  
(229号、1920年11月)の中央地方楽況欄にも、  
新潟での音楽会と並んで岡山の音楽会が報告され  
ているが、内容は『山陽新聞』のものと同様である。

9月下旬の大阪、岡山での公演はグループの一員としての活動であり、東京、北海道、新潟の独唱会とは全く性格の異なるものである。柳宗悦の事業とは関係がなかったと考えるべきだろう。

以上のように兼子の日本国内での独唱会について詳細に整理してみると、実は柳の文化事業との関連性はそれほど明白ではない。現時点で関連性を示す資料が存在するのは、7月東京と9月の新潟のみである。北海道においてははかろうじて小樽啓明会との関係性がその可能性を示唆し、北海道・新潟が一連のツアーであることを勘案すれば、何らかの関連性を想像させる。だが、阪神、岡山での音楽界についてはおそらく無関係だと判断すべきだろう。

#### 4. 「彼の朝鮮行」再考

「彼の朝鮮行」における兼子の国内での音楽活動に関する記述は実情に則しているとは言えない部分を含み、記述内容と現実との間にわずかな亀裂を生み出している。それは小さな亀裂であるが、この亀裂はこのテキストの性格を如実に語っているとも言える。本節ではその性格について検討して、このテキストの再評価を試みたい。

柳は1920年、『改造』誌に「朝鮮の友に贈る書」(6月)を発表した後も、「未来の宗教哲学に就て」(8月)、「彼の朝鮮行」(10月)、「赤化に就て」(12月)と立て続けに論考を発表している。また1922年7月には「失われんとする一朝鮮建築の為に」を同誌に発表しており、『改造』は『白樺』とならんで柳の政治思想的な発言の場となっていた。

「朝鮮の友に贈る書」については先述の通りである。「未来の宗教哲学に就て」は、宗教哲学者としての柳の側面を見せるが、ここにおいては西洋至上主義を批判し東西宗教の相互理解の重要性を訴える。

「赤化に就て」は尼港事件を踏まえて日本人とロシア人との対話を想定しながら、日本の軍国化を憂慮する内容になっている。これも多くの部分が伏字とされた。このように当時柳は朝鮮問題や東西相互理解の側面から、政治思想的な発言を治安当局からの圧力を顧みず展開していた。そのような環境で「彼の朝鮮行」は発表された。

また、「彼の朝鮮行」は冒頭に「断片」と記されている通り十三に分かれた断章によって構成されている。独唱会計画への思い、「趣意書」の全文の紹介、朝鮮半島の風景、京城での歓迎や街の様子が各章で語られる。朝鮮人の子供達と日本人女性教師との情

愛に溢れたふれあいの様子を涙を流し、講演会会場で警察の監視がひどいので言動に気をつける様に助言してくれた朝鮮人の友情に感動している。一方で電車の中で日本人が朝鮮人の老人の帽子をいきなり取り上げるエピソードを紹介し、憤りながら心中で老人に「許してくれ」と呟く。帰国後「朝鮮の友に贈る書」が『改造』に伏字だらけで掲載された経緯を説明しつつも、全国から送られてきた「自分もまた先生と同じ愛を持ってゐる一人である」、「涙ぐまずに読む事が出来なかった」といった書簡を引用している。『東亜日報』に掲載されたことや英字新聞にも訳出されたことも述べられ、多くの共感を得たことが強調されている。

「彼の朝鮮行」は、柳宗悦本人と特定できる「彼」の朝鮮旅行での言動や見聞、旅行後の周囲の反応、そしてそれらを通じた「彼」の所感が述べられる、という形式に特徴が見られる。「朝鮮の友に贈る書」では「私」という一人称が用いられ、柳宗悦本人が朝鮮人に熱く語りかける文体とは対比的に、「彼の朝鮮行」の語り手は「記者」という名前で文中に登場し、その記者が「彼」＝柳宗悦について客観的な立場から叙述していくという形式をとっている。柳はそれまでこのような叙述形式をとったことはないが、その理由として最初に考えられるのは検閲を逃れるためということが考えられる。「朝鮮の友に贈る書」は「私」の思想を前面に表出したテキストであり、その結果伏字処理されることになったが、「彼の朝鮮行」では伏字箇所はない。

だがそれ以上に重要な背景として、「彼」という三人称を用いることで得られる思想表明上のメリットが考えられる。これについて梁智英<sup>(16)</sup>の指摘が示唆的である。梁は、このテキストをリアリズム小説的な形式で書かれたものと捉え、客観的な立場での描出によって「彼の思想や行動が「広く日本の人々に共有されている」ことを示し、柳宗悦と若者たちとの共鳴・連帯関係を客観的事実として可視化することを可能にしたという。たしかに、「彼の朝鮮行」の中では、「彼の朝鮮での活動に加え、その前後に全国から寄せられる書簡を引用している。実際に柳宗悦が受け取った書簡と考えられるが、このような社会的な反応を紹介することで、「彼の行動とその社会的評価を同時に示すことができるだろう。

また梁の指摘に加えて、当時いわゆる「私小説」が一つの流行のピークをなし、作家自身を主人公とした創作が多く発表されている点にも着目すべきだ



ろう。白樺派の作家もその担い手の中心にあり、柳が自分自身を主人公＝「彼」として小説風に旅行記を書く事自体は意外なことではない。「彼の朝鮮行」は創作欄に掲載されているものではないし、思想家、哲学者として認知されていた柳宗悦の著作を、当時の読者が小説とみなしていたとは考えられない。しかし、日比嘉高<sup>(17)</sup>が論じているとおり、明治末年頃より徐々に作家が自分自身のことを小説、すなわち「自己表象テキスト」として発表するようになり、そして読者もまた作品の背後にある現実を補って読むという習慣が生み出され、大正期には定着していた。読者の関心は作家そのものに向けられ、新聞雑誌の作家消息欄や楽屋話が関心を集め、その様なメタ情報を共有する読者共同体が成立していたのである。だとするならば、柳＝「彼」を主人公とする小説的な文体で書かれた「彼の朝鮮行」は、「自己表象テキスト」として受容されて、共鳴する読者層に柳の消息や計画を伝える役割も果たしていたはず、と考えられるのである。

柳の朝鮮問題に対する思想と文化事業の計画は、『読売新聞』や『白樺』を通して多くの人々に伝えられていた。すでに述べたとおり、柳は1月28日付『読売新聞』紙上において、「社会救済事業」費用と、「朝鮮芸術の研究費」を賄うために独唱会を開催すると述べていた。その後「趣意書」においては、柳の計画は「文芸雑誌の経営」と述べられ、さらに「彼の朝鮮行」に至って美術館設立へと計画は塗り替えられていった。計画が修正され徐々に具体化されていく過程が読者には見えていたのである。読者にとっては、新聞紙上や『白樺』や『改造』に発表される文章は柳の事業の消息を知るための情報源になっていた。とりわけ白樺に共鳴する全国の若者にとっては、武者小路実篤や柳宗悦のような社会事業に挑む同人は尊敬の対象であり、その動向は逐一注目される。その中から式場隆三郎のように、それらのメディアを通して事業計画を知り、協力を申し出る人々も現れたのである。

「彼の朝鮮行」には、「朝鮮の友に贈る書」を読んだ「田舎にいる一人の敬虔な友」から「音楽会を開いて其純益金の全部を送る」との申し出の手紙を受け取ったという挿話が紹介されている。この手紙の差出人としては、新潟の式場隆三郎の可能性が想定される。このエピソードは、柳のメディア上の言論活動に対して読者からの直接的なアプローチがあり得たことを示している。読者は柳の言論活動を通

じて、柳の思想を理解し、計画の進展と柳の言動を見守り、共感して協力を申し出るのである。つまり「彼の朝鮮行」は、読者に対する事業報告的な役割を果たしており、柳と読者とのコミュニケーションの手段となっているのである。

そして、柳はこの文章中で朝鮮民族美術館の設立の思いを初めて公にしている。柳は「彼」の手記を紹介する形式を用いて、「残された作品の無益な散逸を惜しんで、朝鮮民族美術館を設置したい願望をも記した」と書いている。高崎宗司<sup>(18)</sup>によれば、柳は5月の朝鮮旅行時に京城において浅川巧宅を訪問して、そこで李朝の壺に感動し、そのような朝鮮の工芸品を展示する施設として朝鮮民族美術館を設立することを思い立ったという。同じ年の冬に浅川が今度は我孫子の柳宗悦を訪ね、そこで話はまとまって翌1921年1月の「朝鮮民族美術館」設立趣意書の発表に至った。4月の音楽会趣意書の段階までは柳は文芸雑誌の経営の計画を述べていたが、朝鮮旅行を契機に陶磁器を中心とした美術事業へ転換したのだろう。「彼の朝鮮行」の一節は、浅川巧と共に計画を温めていた計画の一端をここで明かした形になる。

そのような柳の内部で起こっていた出来事を、柳自身が「彼」の手記の一部を公開する形で読者にメタ情報として伝える役割を果たす。柳の文化事業の動向を期待をもって注視している共鳴者にとっては待ち望む情報だっただろう。これらのメタ情報によって柳の文化事業の姿は構成され、かつ梁が指摘するような柳と共鳴者たちとの「連帯関係」を可視化する。そして柳は翌年の『白樺』1月号に「朝鮮民族美術館設立趣意書」を発表し、彼らと共に活動を開始するのである。この時にはすでに全国にこの美術館の支援者の輪が出来上がっていた。美術館設立趣意書は『白樺』だけではなく『アダム』(3巻1号、1921年1月)にも掲載され新潟の読者に発信されていた。アダム社は1921年にも兼子の独唱会を開催して、美術館設立運動に協力している。同様に朝鮮民族美術館設立運動は朝鮮、国内各地で展開され、1924年4月の開館に至るのである<sup>(19)</sup>。

## 5. むすび

「彼の朝鮮行」というテキストは、柳宗悦本人の朝鮮旅行とその後についての言動を示す伝記的資料として貴重な記録を残している。これを含めた一連のテキスト群は、事実確認的に人道主義者としての

柳宗悦、柳兼子夫妻の像を形作り定説化してきた。一方で柳宗悦がこれらのテキストを通して何を成し遂げようとしたのか、という側面に着目してみるならば、テキストの行為遂行性が浮かび上がる。

柳宗悦と兼子の一連の実践は、それ自体事実であるが、「彼の朝鮮行」として書かれることで柳の思想実践として実体化し、読者共同体にそのように受け入れられ、共鳴者の輪を形成した。兼子の独唱会的主催者や聴衆は、必ずしも柳の文化事業のコンテキストの中で受け止めていなかったが、柳宗悦が事後的に「彼の朝鮮行」に記述することで、彼らの活動を再配置、再構成して、文化実践の機運の高まりを読者共同体に対して見せていったのである。

敢えて三人称を用いて書かれるこのテキストにおいて、「記者」と呼ばれる語り手が読者共同体の一員のように振る舞い、「彼」の実践に共感してみせる。柳宗悦は、「記者」という仮構された報告者を登場させ、読者に対して共感をもって語りかける。あたかも「記者」が読者と連帯関係を結びながら、

「彼」の事業への協力体制を構築していくような中間的な役割を果たすのである。いわば「彼」の文化事業は、このような柳の言論戦略を通して「彼ら」の事業として運動のうねりとなって展開していくのである。翌 1921 年には、朝鮮民族美術館設立運動を柳は開始する。この運動は「彼ら」共鳴者との連帯と支援によって推進されていった。この共鳴者の支援の輪こそ、柳が「彼の朝鮮行」を含めた諸テキストを通して形作ってきたものである。

さらに言えば、これは木喰上人研究、民藝運動といった柳宗悦のその後の実践活動にも同様に引き継がれていく方法論でもある。彼はそれらの運動においても、自分自身の活動記録を地方紙や『木喰上人研究』『工藝』といった機関誌を通して公開し、全国に散らばる共感者たちに情報提供をしている。柳の文化事業が大きな成功を収めたのはこのようなメディア戦略の役割が大きい。「彼の朝鮮行」はそのような戦略的方法論の初期的なテキストだと考えることができる。

#### 参考文献

- (1) 水尾比呂志：評伝 柳宗悦、筑摩書房、1992
- (2) 高崎宗司：「妄言」の原形 日本人の朝鮮観（増補三版）、木犀社、2002
- (3) 小池静子：柳兼子の生涯、勁草書房、1989
- (4) 小池静子：柳宗悦を支えて—声楽と民藝の母、

現代書館、2009

- (5) 松橋桂子編：柳兼子音楽活動年譜、日本民藝協会、1987
- (6) 松橋桂子：柳兼子伝—楷書の絶唱、水曜社、2003
- (7) 今井信雄：『白樺』の周辺—信州教育との交流について—、信州教育会出版部、1975
- (8) 一志茂樹：随想にみる信州白樺運動のころ、信濃史学会、1981
- (9) 赤羽王郎（王郎生）：六号雑記、アダム、2-4、1920
- (10) 梶谷崇：朝鮮における柳宗悦とその報道をめぐって、日本近代文学会北海道支部会報、7、20-35、2004
- (11) 柳宗悦：朝鮮を想う、高崎宗司による「解説」、253-262、筑摩書房、1984
- (12) 前川公美夫：北海道音楽史、大空社、1995
- (13) 亀井志乃：〈緑人社〉の青春——早川三代治宛の木田金次郎・高田紅果書簡で綴る大正期芸術運動の軌跡——、小樽文学舎、2011
- (14) 伊狩章・箕輪真澄・浮橋康彦監修：越佐文学散歩（上巻）、野島出版、83-84、1974
- (15) 小林多津衛：柳先生と信州 1、民芸手帖、225、8-12、1977
- (16) 梁智英：「彼の朝鮮行」が語るもの、日本語と日本文学、47、27-43、2008
- (17) 日比嘉高：〈自己表象〉の文学史—自分を書く小説の登場—（第三版）、翰林書房、2018（初版は 2002）
- (18) 高崎宗司：増補新版 朝鮮の土となった日本人 浅川巧の生涯、草風館、1998
- (19) 梶谷崇：京城の音楽会—「朝鮮民族美術館設立後援 柳兼子音楽会」の諸相—、日本近代文学、71、17-32、2004

#### 〔謝辞〕

本研究は JSPS 科研費（JP19K00524）の助成を受けたものである。